

で返却されない場合は責了とみなす。

八 刷り上がり一〇印刷ページ（四〇〇字詰原稿用紙で二四枚）までは原則として無料とし、超過分と図表製版の実費は著者負担とする。

九 論文別刷は五〇部単位とし、実費で作製する。別刷希望

編集後記

編集後記を書くのは四一巻三号（平成七年九月）以来である。私をはじめ編集委員を拝命したのは三二巻三号（昭和六十一年四月）からで、以降十年間、編集の一端を担当させていただいた。その間、三六巻二号（平成二年四月）までは矢部一郎元理事が編集委員長をつとめられ、矢部委員長の御病気のあとをうけて三輪卓爾理事が以後八年間委員長の大役を果たされた。矢部委員長は論文審読制や投稿規定の整備に尽力され、雑誌の質の充実化に情熱を注がれた。三輪委員長の功績については前号本欄で深瀬新編集委員長が述べておられるとおりである。

私は本学会の他の委員職も拝命し、十年という区切りもあって、さきの二年間の役員任期間は編集委員を辞したが、は

者は校正刷同封の申込書に部数を明記すること。

一〇 原稿の送り先

〒二二三八四三 東京都文京区本郷二丁目一一一

順天堂大学医学部医史学研究室内

日本医史学雑誌編集委員会

からずも下命により今年度から再びその任を被った。久しぶりに編集委員会に復帰したところ、世は不況のさなかだというのに、投稿原稿は目白押し。ひとり活況を呈している。矢部委員長そして三輪委員長に引き継いだ頃、今思えばバブル景気のときには、投稿原稿は僅々たるもので、いかにして原稿を集めるかに頭を悩ましていたことを考えると、まさに隔世の感がある。

来年はいよいよ酒井シヅ会長のもと、第百・日本医史学会総会が開かれ、本学会は大きな節目を迎える。本学会誌もさなる向上をめざし、将来にむけて刷新化のさまざまなアイデアを検討中である。一層の御鞭撻とご支援を賜りたい。

（小曾戸 洋）